

## 夢見る捕物帳

—松本清張「穴の中の護符」と「役者絵」について—

山口 政幸

1

松本清張の時代小説の中から捕物帳を選ぶとすれば、昭和三十九年に発表された『彩色江戸切絵図』の諸短編、また昭和四十二年に発表された『紅刷り江戸噂』の諸短編が挙げられるだろう。ともに山田有策が指摘することく、これらは先行する岡本綺堂の『半七捕物帳』のような、「全篇を貫いて活躍する岡っ引を造型しようとはしていない<sup>1)</sup>」という特徴がある。主人公となる岡っ引が不在であるということは、いわゆる半七を含め、戦前の昭和期に量産された捕物帳の形式から大きく逸脱することを意味している。すでに数多くの時代小説、あるいは歴史小説を書き上げてきた清張であるが、新たなジャンルとして築かれた捕物帳が出現するまでには、存外、時間がかかっていた。昭和三十九年という時期は、この膨大な仕事量をこなしてきた作家のキャリアとしては、むしろ遅い時期に当たっている。昭和三十九年以前に清張は、捕物帳としか呼べないジャンルの作品を一つ執筆していた。先の山田を追うようにして吉野泰平の取り上げた<sup>2)</sup>、「穴の中の護符」という短編である。昭和三十二年二月号の「小説新潮」に載せられた本作は、「擬本・半七捕物帳」という副題を持つように、綺堂の『半七捕物帳』を文体から構成からすべて真似た「パステイシユ<sup>3)</sup>」の作品だった。清張は、他の多くの捕物帳作品と比べ、綺堂の『半七もの』をこよなく愛していた。と言うよりそれは「半七以外に認めない<sup>4)</sup>」といった体のものだった。「穴の中の護符」は、いわばこうしたかたくな

な敬愛から生れ出た模倣作品であるが、三好行雄が言うように「単なるパロディでは決してない」<sup>(5)</sup>側面があることも事実である。清張は、捕物帳という新たに開拓した小説ジャンルに何を込めようとしたのだろうか。すでに吉野によって、同時代の剣豪小説などの差異から読み取れる「穴の中の護符」の「擬本」としての批評性などは論じられているものの、三好の言う「推理小説作家にふさわしい〈遊び〉」の実態解明には、もう少し別な視角からの掘り下げも必要なのではないか。ここでは捕物帳の原核としてあるはずの推理小説のトリックを視野に入れ、後続した「役者絵」を含め考察の対象としよう。ここで、自身の文学履歴に新たに捕物帳を作り出しながらも早々にそこからの離脱をはかった清張の時代小説家としての表現の一つの推移に焦点を当て考察をめぐらせたい。なお本稿では、内外の複数作品のトリック、犯人への言及がある。

## 2

「穴の中の護符」は、全部で六章から成っている。<sup>(6)</sup>そのうちの1が半七老人が「わたし」にこれから昔話をするという導入部、2から5までが実質の事件が語られていく部分、そして最後の6が、時間的に1にさかのぼって、事件を二人で総括する部分となっている。言うまでもなくこの三部の説話構成自体が半七老人を訪ねて「わたし」が彼の昔話、手柄話を謹聴するという『半七捕物帳』の定番の形式をそのまま踏襲したものとなっている。この話は文久二年という原典の半七ものの空白を埋めるような年代を設定しているようだ。<sup>(7)</sup>事件の舞台となったのは上野の根岸だが、この入谷、根岸の地域から、半七の六十番目の事件である「春の雪解」との関連性を、すでに『半七捕物帳事典』の編者である今内孜が指摘していた。<sup>(8)</sup>季節は綺堂の「春の雪解」が早春であるのに対して、後述する死体との関係からか、清張の方は「十一月の鞠祭が来るころ」<sup>(9)</sup>になっている。

「穴の中の護符」とは、近辺の住人が住む寮の家に掘られた穴とその中に紙吹雪のように置かれていた伏見稲荷大明神の木版が捺された半紙の護符を指す。これは、この場所に埋めておいた金を掘り出すために掘った穴を、あたかも神がかり的な現象のようにごまかすために用いた、盗賊らの目くらまし「手間のかかった手品」だった。所柄、水商売上がりの者の多いところで、こうした信心深い者たちには「その不思議な現象に先ず信仰的な感動」を引き起こしたわけである。ここでの盗賊らの知恵は、どうやってそこに住んでいる複数の住人たちを、一時的に外へ連れ出して、穴を掘るまでの時間を稼ぐか、にあった。そこで使われたのが、死体を使ったトリック、自分たちとは無関係な死体を使いニセの葬式を出して、斎の馳走をふるまい、住民を足止めすることによってその間の時間を穴掘りにあてるといったものだった。事件の終盤近く、自分である湯屋熊に半七は次のように語って見せる。

「女は死体が欲しかったのだ。つまり、その死体を拾ってきて、とむらいを出すことが目あてだったのさ」

「妙なことを考えたものですね。どういう了簡ですかえ」

「つまり、近所の人間を集めて、家を空にするのが狙いだったのだ。とむらいを出して近所の人たちを信用させ、偽の斎に呼んでみんなに留守をあげさせたという寸法だ」

「なるほど、その留守に誰かが穴を掘って稲荷の護符を授けてきたというわけですね。その仕事をしたのは、女と共謀だった奴の仕業ですね」

「お前の頭の血のめぐりも、だいぶん早くなった」半七は煙管をはたいて言った。

これは通常の死体を使ったトリックからすると、かなり異例のものである。死体は、往々本人が死んだ証拠として

扱われることが多いからだ。つまり、ある人間を死んだことにするための現物として使われる。この「穴の中の護符」と同じ年に書かれた「怖妻の棺」がまさにこれに当たる。

「怖妻の棺」は昭和三十二年十月「週刊朝日別冊 炉辺読本」に発表された。旗本で養子の香月弥右衛門は、妻のおとわに頭が上がらないでいたが、友人の戸村兵馬の勧めで、年若い茶屋の娘おみよを囲うことになり、おみよも年の差を忘れ弥右衛門の人柄に引かれていった。ある日、弥右衛門はおみよの家で卒中で倒れ、亡くなってしまった。戸村が香月の妻に知らせるが、権高なおとわは夫の遺骸を引き取ることを峻拒する。ところが、弥右衛門は息を吹き返してしまっていた。当主の死亡届を出し急な養子縁組をすでに申し立てた以上、弥右衛門は再び死ななければならない。腹を切ろうとしたときに、兵馬の懇意とする植木屋の仁兵衛の機転でもって、処刑された罪人の死体を使い葬儀を出して、弥右衛門らはそのまま駆け落ちをする。処刑された罪人という別の死体が、弥右衛門の身代わりとして、「怖妻」の「棺」に収められたわけだ。「穴の中の護符」の方が先行しているので、こちらの方がバリエーションとすることになるが、死体を利用するというトリックとしてはこちらの方が通例な使われ方と言えるだろう。身代わりの死体を手に入れるというのは現代ものではおそらく考えられない、時代ものならではの趣向だろう。

この死体入れ替わりも考慮してか、清張自身はこの「怖妻の棺」を「時代ものだが、一種のミステリー仕立ての短編となった」と自作解説で語っていた。<sup>9)</sup>それは、一義的には、死体の入れ替えをおこなう当事者が、年離れた仁兵衛であって、視点人物の戸村兵馬がうかがいしらないところであり、最後にその謎解きが彼の手によっておこなわれることを指すだろうが、より大事なのはそこに行きつくまでのプロセスで個々に用意された細部の事象が結末の意外さと矛盾を引き起こさないか、ということである。その意味で言えば、兵馬が何気なく裸馬に乗せられた罪人を見ることはあらかじめ描写されており、また、妻のおとわが持ち前の狭量から棺に触れようともせず、遺骸となった夫の顔

をまったく見ようとしないうちにも、自然な心の動きとして読者には納得できるものとなっている。こうしたエンディングの小気味よさも手伝い、「怖妻の棺」は清張にしてはユーモラスな作品となっている。

それでは、「穴の中の護符」の中の死体は物語中どのように登場するのだろうか。死体を手に入れるという江戸時代でもそう容易ではないはずのその行為は、どのようにしておこなわれていくのか。物語の開始時点で始まるこの死体の引き取りという作業は、行き倒れの遺骸を始末するという江戸の行政制度を調べ上げ記述することで、小説としてのリアリティーの定着化がはかられていたのである。

その霜降りの朝、谷中の玉林寺門前町に行仆れ人があるといつて自身番に届けて出た者があった。番人が行ってみると、六十二、三歳くらいの老爺で、病気の果に行倒れて死んでいることが分った。(略)

他殺以外の身元の知れないこういう変死体は、芝口町河岸に収容して、七日の間、場所、推定年齢、着衣、所持品などを記した札を建てて置くのが定法である。心当りの者は、その札場に行つて文言をよみ、死骸を引取るなり、怪しい節があれば吟味を願ひ出るなりする。この処置の範囲は、南は品川から長峰六間茶屋町限り、西は代々木村より上落合村、板橋限り、北は板橋村、王子川、尾久川通り限り、東は木川下村川通り、中川通り、八郎右衛門新田村限りとした。(略)

さて、谷中の行仆れの老人の屍体も、番人から届出て芝口町河岸(今の新橋汐留のあたり)に非人の手で送り、其処で札を立てて七日間置くことになった。

その二日目のことである。置場の立て札をつくづく読んでいた若い女があった。色の白い、小股の切れ上った佳い女である。彼女は黒い瞳に愁いを籠めて、何度も立札を読んでいたが、遂に意を決したように竹矢来をくぐつ

て番小屋に入った。

こうして一味の女は、半七の言う欲しかった死体を手に入れることになる。そしてこれを自分の父親と偽って、「高祿の武家や裕福な町人の別荘」が立ち並ぶ自分たちが借りた入谷の家に運び、葬儀を営んで周りの住人を下働きのものまで含め齋で誘い、自分の家に引き付けて置いた。もともとここは「つい二、三年前までは、雑木林と藪地であった」ところなので、盗賊らが庚申塚を目印にして金を埋めたのだが、三年の間に所在が分からなくなってしまったのである。

先述した6の部分である「わたし」との対話の中で、半七は自分の推量がやや外れていたことを素直に認めて次のように言う。

「湯屋熊の報告は、わたくしの見当と少しはずれましたが、およその的は当りました」

と半七老人は、ここまで話してきて、ひと息つくくと茶を舌ママんだ。

「わたくしの想像では、目印になるような樹でもあったのかと思ったら、古くからいる土地の人の話では、庚申塚があったそうです。ほら、道端に仏さまのような像を彫った石が置かれてあるあれです。しかし、それにしても、何かの目印になることは確かです」

「何の目的ですか」

わたしは訊いた。老人は少し微笑った。

「それをお話する前に、わたくしが大へん思い違いをしていたことを言わねばなりません。わたくしは護符を

入れるために穴を掘ったと思っていたのですが、そうではなくて、何かを地中から取り出すために穴を掘ったのだと気づきました。護符を入れ替えたのは、それを胡魔化するためです。それにしてもお稲荷さまの護符にしたのは考えたものです。こういう神がかりなことになると、少々辻褄が合わなくとも、当人たちもおかしく考えませんからね」

原典の綺堂の半七もしばしば見当違いやしくじりをしたりする。それが彼の人間臭さを時に醸し出すのだが、ここでの「思い違い」は、かなり決定的である。護符はあくまでカムフラージュに過ぎず、それを入れるためでなく、再三述べているように埋めてあるものを掘り出すための穴を素早く気づかれないように掘ることが目的だったからである。ここでの半七は、結局のところ住人と同じ目線で護符の意味を探ろうとしており、穴自体の目的に考えの及んでいなかったことが自身の口から認められていくのである。が、実はここにこそ、この小説の最大のトリックが仕掛けられているのではないか。

綺堂の半七である「春の雪解」も、実は埋められたものがあつた。それは殺された娘の死体だった。殺したのは嫉妬に狂った花魁である。入谷の寮という設定は、自分の勤める店の若旦那と通じ合う、いわゆる「突通しつととおし」という「廓の禁物」を演じるために別空間として用意されたものであつた。しかしこれは殺した遺体の隠し場所としてはきわめて平凡なものである。犯行を犯した者がするのは「隠す」という行為であつて、自ら掘り起こすことではないのは言うまでもない。清張が利用したのは、入谷というわずかの間に寮が立ち並ぶようになった地勢と、家のうちの地面から何かが出てくるという最小限の趣向であつたらう。

が、この「穴の中の護符」においても、清張が本格風のヒントを記していることは、注目される。先に述べたよう

に、盗賊に金で雇われた女義太夫は、娘を演じて、父親の行き倒れになった遺骸を引き取りにやってくる。囲われ者としての芸者である彼女が実際に住んでいるのは日本橋あたりの呉服屋の主人が誂えた入谷の寮のはずだが、引き渡しの役人に対して、自分の身元を言う際には、「神田の六軒町です」というまるで方角違いの場所を申し立て、「泪を拭きながら答え」ているのだった。この時点では、単なる娘と父親の居住の相違と認識されながら、彼女たちの犯行が分かった後では、これが意識的な嘘であり、役人の目を誤魔化す手立てであったことが読者には事後的に了解されるようになっていた。

死体を手に入れ操作するというやりかたは、先述した小説内の人物を中核に据えたりアリティから案出される「怖妻の棺」のような方法と、この「穴の中の護符」のように江戸の行政制度を語り手の側から報告し物語世界と結びつけるやり方と、異なる二通りのやり方があり、それを当時の清張が同時に手にしていたことに改めて気づかされるわけだが、後者のような場合にも、本格風なヒントを残しながらストーリーを進めることを忘れないのは、「小説新潮」という発表誌に、連続して推理小説的な短編を書き続けていた当時の清張のいわば必然の成り行きだったとも考えられる。前年の昭和三十年十二月号の「小説新潮」に書かれた「張込み」が清張の推理小説への傾斜の始まりと一般にされるが、翌年三十一年には従来型の時代小説、歴史小説の執筆と並行して、「殺意」（四月号）、「顔」（八月号）、「なぜ「星図」が開いていたか」（週刊新潮）八月二十日号）、「反射」（九月号）などの執筆が連続しておこなわれた。「穴の中の護符」の一月前と同誌に発表された「金庫」なども、明らかに江戸川乱歩の「二銭銅貨」の世界を意識して書かれたものであり、この「穴の中の護符」もこうした系譜の連続の中に表された、推理小説としての「捕物帳」であることは疑いない。

「小説新潮」の側に、文壇の既成作家と張り合わせる意図があったのか、「殺意」の併載は大岡昇平の「雪の上の声」<sup>(10)</sup>

「顔」の併載は同じく大岡だがゴルフ談義の随筆「憑かれた人々」、「反射」は加田伶太郎（福永武彦）の「幽霊事件」、翌年の「金庫」も加田の「温室事件」、「地方紙を買う女」も加田の「失踪事件」と両者は競うように雁行し、常に「二大推理小説」という名で目次を飾っていた。加田のは大学の助教伊丹英典が活躍するスタイリッシュな本格の連作でエラーリー・クイーンを真似たものだが、清張はそのつど持ち味を変えながら挑んでいる。詳述は避けるが、ここでは江戸川乱歩を想定した探偵小説への原点回帰が見られるのは、先の「金庫」に先んじて、「反射」における「ミュンスターベルク」の使用例などに明らかだろう。この検査法の紹介と応用とともに乱歩の明智小五郎が「D坂の殺人事件」、「心理試験」で探偵として誕生し確立されていたのは探偵小説界の周知の事柄であるからだ。清張がそれまでの時代小説から推理小説への切り替えに挑みもがきつつあったのが、まさにこの昭和三十一年から三十二年にかけてであった。

## 3

それでは、清張における、こういった「推理小説」競合環境のさ中に書かれた捕物帳が依拠したものはたして何だったのだろうか。それは、原典中の原典ともいえるシャーロック・ホームズの「赤毛連盟」だったと考えられる。最新の訳者である石田文子の言葉を借りれば、「発想の奇抜さといひ筋書きのおもしろさといひ、ホームズものなかでもまちがいなく一、二を争う名作」とされる初期ホームズものに属するあの「赤毛連盟」である。<sup>12)</sup>

「赤毛連盟」は、典型的なイギリス商人と見える赤毛の質屋からの依頼だった。質屋はその見事な赤毛で、「赤毛連盟」に加入でき、毎日十時から二時までのあいだ指定された場所で大英百科事典を書き写すという作業でそこそこの報酬をうけとることができた。赤毛連盟はアメリカの大金持ちの遺言で、見事な赤毛の成人男性にのみ、特典を与え

るというものだった。ところがこの結構な副収入が突然打ち切られ、途方に暮れた男がホームズのもとをおとずれたのだった。『シャーロック・ホームズの冒険』を読んだことのある人ならおそらくだれしも記憶に残る作品と言っても過言ではない。

これはホームズものの初期の作品であり、トリックとしては先行するポーなどを参考にしてない、ドイル独自のものだった。彼はこのトリックを同じホームズもので、「株式仲買人」や「三人ガリデブ」にも使っている。つまり、ある目的を帯びた犯罪者が、そこに住む住人を一時的に立ち退かせ、その家の地下を掘るという趣向である。「株式仲買人」はやや外れるが、「赤毛連盟」では、向かいの銀行までの秘密の通路を掘り進めるため、「三人ガリデブ」はその珍しい名字でつり出された男の家にあった地下室のせ札製造の機械が目的で、それぞれの人物が連れ出されたことになる。

清張の半七との違いを考えた場合、ワトソンに語って見せるホームズの次の言ほど、鮮やかにそれを証明してみせる箇所はないだろう。石田文子訳から引用する。<sup>(13)</sup>

「いいかい、ワトソン」その日の深夜、ベイカー街でウイスキーソーダを傾けながら、ホームズは説明した。「こんどの事件では最初からはつきりしていたことがある。それは、例の奇妙な赤毛連盟の広告と百科事典の書き写しは、あのちよつとまぬけな質屋を毎日数時間、家から遠ざけておくための方策にほかならないことだ。

先に引用したとおり、「穴の中の護符」の半七は、護符の方の意味へ思いを巡らしており、穴への注目は当初なかったことを認めていた。しかし、ここで半七がホームズのように、その穴の目的を初めからわかりきっていたとしたな

らば、清張のトリック模倣はすぐに気づかれてしまうのではないか。半七を他の住人たちと同様に気づかない、気づけない状態にして置くことで、このトリック模倣の痕跡が少しでもやわらげられたとするならば、先に述べたようにこれ自体が最も正確に読者に向けられた作者からの「トリック」だったとは考えられないだろうか。

この住人を一時的に遠ざけるという手立ての部分を、石田以外の訳でその代表的なものを挙げると、「留守にさせる」(延原謙 新潮文庫)、「店から連れだす」(阿部知二 岩波文庫)、「どこかへやっておく」(菊池武一 岩波文庫)、「店から遠ざける」(大久保康雄 ハヤカワ文庫)となる。原文の該当箇所は“must be to get this not over-bright pawn-broker out of the way for a number of hours every day”とな<sup>(12)</sup>っている。この“out of the way”に付合するのが先の訳文の箇所である。半七が湯屋熊に語って見せた「近所の人間を集めて、家を空にするのが狙いだっただ」は、この“out of the way”を見事に江戸の生活の中に溶け込ませた肝の部分を、作家自らが探偵の口を通して語る箇所にほかならない。

ホームズの推理に飛躍はなかった。彼は当初から、半額の賃金でこの質屋に住み込んだ店員を怪しいとにらんでいた。「その店員さんこそ、例の広告に劣らないほど珍しい存在かもしれませんよ」と最初の挨拶の時点で、店員の奇妙さに目をつけていたが、これが単なる質屋への儀礼的修辭か否かは、はっきりとはわからない。が、実際に質店に行き、その店員を観察したのちに、「大きな犯罪が仕組まれている」ことをワトソンに告げている。これはワトソンが言うように推理の鎖が見事に連鎖として繋がっていくホームズものの中でも最も瑕瑾のない屈指の作品であるのは、最後に漏らすホームズの「人物はどうでもいい。作品がすべてだ」というギュスターヴ・フロアベルの引用に表れた自信のほどからもうかがえよう。清張は、半七を飛び越え、本家本元であるホームズものの最上級作品の応用を企てていたのである。文庫の解説に制約された三好行雄は、当然知っているはずのその知識を出すのを控えたと思

なすべきかもしれない。

## 4

「赤毛連盟」のトリックは十九世紀的なユーモアを含んでいる。「赤毛連盟は解散します」の通告を受けたことを話し「悲しそうな顔」をしている質屋の様子は思わずホームズとワトソンの笑いを誘ってしまう。現代的な目から見れば、差別的な視点と無関係とは言いい切れないかもしれないが、この映笑は現代の読者にも容易に受け入れられるものでもある。「赤毛連盟」が優れているのはこうしたユーモアだが、このおびき出しのトリックに関して言えば、その命名がなかなか困難なものでもあるようだ。それは江戸川乱歩の「類別トリック集成」の中で、このトリックが、結局のところ作品名そのものを借りてしか呈示できていないことから容易に理解できよう。<sup>(15)</sup>

「赤髪」トリック（六例） Doyle の「赤髪聯盟」の類型に、仮りにこの名称をつけた。赤毛の人を募集するといふ奇抜な罪のないカムフラージで、別の大犯罪を目論むという着想。これの類型、Doyle の短篇に三例あり、ロバート・バーの短、シメノンの短、ブッシュの長など。

『続・幻影城』へ向かい執筆中の乱歩でも、このトリックに演繹的な名前を付けるのに、考えあぐねているのがよく伝わるだろう。<sup>(16)</sup> 同じように、作品がそのままトリックの名前にならざるを得なかった作品が、ちょうどこの次に出てきて紹介されている。それは「二つの部屋」トリック」というものである。「赤毛連盟」が推理小説界で最も著名な古典そのものと言ってよい作品であるのに対して、この「二つ部屋」は作者名すらはつきりしない無名に近い作家

によって考案された殺人トリックであった。そして、この「二つの部屋」のトリックが応用されたのが、昭和四十二年の「別冊宝石」一月号（新春号）に掲載された清張のやはり「捕物帳」の「役者絵」であった。

乱歩の「類別トリック集成」が連載されたのは、昭和二十八年九月、十月「宝石」である。戦後の探偵小説界を牽引した雑誌「宝石」が出版されたのは、昭和二十一年四月であった。発行元は岩谷書店である。その後「宝石」は、戦前に『若さま侍捕物手帖』で探偵小説界に加わった城昌幸に昭和三十一年七月号から手渡され、新たに宝石社として発行される。もともと城は、「宝石」創刊時の主幹としてかかわった存在でもあった。したがって、誌面上の変化は全くなかったと言ってよい。発行元の事務所の住所も岩谷書店のままである。乱歩の「類別トリック集成」の執筆時期は、この城昌幸の経営より以前の岩谷時代に当たっているが、城と乱歩は一体になって「宝石」を支えあつた仲間だったと言ってもよい。表紙にはたえず「江戸川乱歩編集」の文字があつた。城は自分と傾向の異なる新人の発掘にも意欲的に努め、乱歩も戦後乱立し消えていった数多くの探偵小説雑誌の中でこの「宝石」だけは守り通す意気込みで私財もつぎ込んだが、乱歩の健康状態の悪化に伴い、昭和三十九年五月に廃刊となった<sup>(17)</sup>。その後「宝石」は、翌年の昭和四十年十月から、光文社による「Kappa Magazine for a Man's Life」と銘打たれた総合雑誌へと変貌する。その新たに変身を遂げた光文社版「宝石」の創刊号へ清張が贈つたのが、『Dの複合』の連載だった。

宝石社時代の「宝石」が清張にとつて忘れがたいのは、なにより『ゼロの焦点』の連載続行が、乱歩の厚誼によつてかゝつたことだろう<sup>(18)</sup>。先の「小説新潮」が清張を推理小説家に押し上げた意義のある雑誌だったとすれば、この「宝石」の十九年に及ぶ転変推移と光文社による再刊は、清張にはつきりと推理小説業界の世代交代を感じさせたそれだけに相違ない。ちょうど光文社によって新たな「宝石」が出るちょうど二カ月前に巨星乱歩は鬼籍に入っている。「役者絵」が載せられたのは「別冊宝石」だが<sup>(19)</sup>、「推理小説特集号」と銘打たれた表紙には、「松本清張責任編集」とあつ

た。翌々年の昭和四十四年には、「光文社カッパ・ノベルズの著書売り上げ部数が、この年一〇〇〇万部を突破した」<sup>(20)</sup>とあるように、光文社にとって上り坂をひたすら歩む松本清張という存在は、こうした特集を束ねる際にまさに掛けがえのない名前となっていた。「別冊」の新春号に名を連ねる十三名の作家たちはすでに清張の後進の作家たちと言つてよい存在ばかりである。「役者絵」という捕物帳が投じられたのは、まさにこういった状況下にほかならなかつた。この「別冊宝石」には時代小説、捕物帳は清張の「役者絵」のほか載せられてはいない。

こうしてもともと単発で書かれたはずの「役者絵」だったが、それと並行して、清張は再び「捕物帳」の連載を開始する。「役者絵」と同じく昭和四十二年一月から講談社の「小説現代」に掲載された『紅刷り江戸噂』のシリーズがそれである。「七草粥」、「虎」、「突風」、「術」が各月二回に分けられて掲載が続き、「役者絵」を加えた全五話で、現在の『紅刷り江戸噂』となっている。このうちの「虎」などは明らかに『半七捕物帳』の「張子の虎」を意識したものと考えられるが、ここでの詳述は省きたい。<sup>(21)</sup>

「役者絵」は以下のような話である。二月二日の大雪の二日灸の折に、荷揚げ人足の宗太は、二十二歳のお蝶という美しい囲われ者と知り合い、すぐに情を交わす仲となる。お蝶の旦那の六右衛門は浅草の商人で、五十代の後半だった。お蝶は掛け取りの時に寄っていく六右衛門を殺して金を奪い、駆け落ちをするように持ち掛ける。二人の関係はまだ誰にも知られていないので、宗太さえお蝶との関係を口を割らずにいれば捕まることはないと言われ、宗太も同意して殺害に及んだ。ところが御用聞き文五郎は、にわかには景気の好くなった宗太に目をつける。お蝶との仲はおろか、知りもしない人物だと言いつ張る宗太に、お蝶の部屋と全く同じしつらえをした部屋に酔いつぶした宗太を誘い込み、「お蝶、お蝶。水をくれ」と思わず声を上げた瞬間に、文五郎たちが登場する。この部屋は文五郎の手先の四畳半だったのだ。

六右衛門が通うお蝶の部屋には、好みの歌舞伎役者の似顔絵が貼ってある屏風があった。酔った宗太が見分けがつかなかったのは、この役者絵の貼られた屏風で誤魔化された部屋だったためである。

あえてミステリーの常道風な言い方にならうならば、これは一種の倒叙ものだと言えるだろう。倒叙ものと言っても、殺害に及ぶところなどは時間が飛ばされているので、一編の眼目は、犯人の自供かそれに近い状態に追い込まれるところにある。この場合は、宗太が知らないと言いつけるお蝶の存在を知っていると云ってしまったら、アウトだったということになる。そこで文五郎が用いたのが、「二つの部屋」のトリックだった。本作に対してすでに権田萬治は「古典的な「二つの部屋」のトリックを逆用して、犯人に本音を吐かせる」と明確な定義づけを行っている。<sup>(23)</sup>

この「二つの部屋」の元の小説については、「類別トリック集成」の中では以下のように紹介されていた。<sup>(25)</sup>

何から何まで全く同じ部屋を、ビルの一階と上の方の階とに作り、被害者を一階で身動き出来ないように縛り、そばに時限爆弾を仕かけて、何時何分にはお前は粉みじんになると云い渡し、それから眠り薬をのませて、被害者を上の階の部屋に運んでおく。被害者は、眠りからさめると爆発寸前の時間なので、一階だと思い、ドアをあけて飛び出す。ところが、上の階のその部屋は、ドアの外にエレベーターの穴があるので、そこへ墜落して死ぬという、手を下さずして人を殺すトリックなのである。

かなり手の込んだ不自然な殺害方法のようにも感じられようが、「新青年」(大正十一年七月特別増刊号)に載せられている原作を読むと、あまりそうは感じない。妻のあやまちをネタにゆすりをかけてくるチンピラのような人間を殺すため、自らのアリバイを整えておく必要性と、ビルディングのエレベーターというそれまで使われたことのない

ものを利用した点、このトリックは明らかに斬新さで際立っている。なおこの訳者は前年に処女作「恐ろしき四月馬鹿」を同誌に寄せた若き日の横溝正史であり、その初めての翻訳であった。

乱歩はこの「類別トリック集成」の中で、「機械的に過ぎ、二三の例外を除いて幼稚なトリックたるを免れない<sup>(26)</sup>」という、奇抜さを狙ったトリックにおける「幼稚」さについても言及していた。「犯行時、犯人が室内にいなかったもの」のうちの「室内の機械的な装置によるもの」がそれに当たりますが、その隣に併記してある「室外よりの遠隔殺人」などは、例えば野村胡堂の『銭形平次捕物控』の「花見の留守」でそのまま使われたものである。縄田一男の「解説<sup>(27)</sup>」での引用をそのまま使えば、胡堂自身はここで「学者大人にも頭を一つ捻らせる謎を用意した」ようだが、平次の解決の仕方の性急さも含めて「幼稚」さが漂うのは、こうした「類別」化され得る使い古された既存の「トリック」をそのまま「捕物帳」というジャンルに持ち込んだためだろう。ひずみを作らないように説明を施せば施すほど、観<sup>かん</sup>世<sup>ぜ</sup>燃<sup>も</sup>りを使った鉄砲の自動発射などは不自然に見えてしまう。胡堂はここでは意識的に背伸びをしてそうした無理のある方法のトリックを使って見せているのだろうが、胡堂自身はむしろ、江戸という近代以前の歴史的拘束を背景として書かれなければならない「捕物帳」の世界を、その極限化される制約の世界ゆえに一つの可能性のある「文学」として、称揚もし自ら恃んでいた作家でもあった<sup>(28)</sup>。

捕物小説の構成上の制約は実に大きい。第一に、ピストルも青酸加里も使へない。ビルディングで活躍することも出来ない。時間の問題にしても、ゴーンと鳴る鐘の音にしか頼るべきものがない。この様に非常に極限された制約の中で、人間と人間―心と心とのふれ合ひの中に、ただ、人情の機微の中にトリックが生れ出なければならぬ。一切の「非人間」は活躍の余地なく、ただ「人間」そのものに關聯してトリックが生れねばならない。

「捕物帳」を「季」の文学であると言い切った白石潔の「軍閥と闘った『捕物帳』」<sup>(20)</sup>でも引用された胡堂の有名な「捕物小説」観である。先の平次ものとの矛盾はないのかと疑いたくなるが、胡堂の中ではおそらくないだろう。それは再び乱歩の「類別トリック集成」の言葉を借りれば、トリックを再利用するのは、その変化と創意による、ということになるからである。<sup>(30)</sup>

「二人二役」にせよ、「密室」にせよ、よくもこんなに重複して使われたものだと、探偵小説の局外者にはバカバカしく感じられるであろう。しかし、同じ「二人二役」「密室」の中にも、いろいろな変化があり、夫々創意があり、探偵小説好きは、そういう変化と創意さえあれば、決して又かという嫌悪感を持たないのである。

それでは清張の「役者絵」には、どんな変化と創意とが認められると言うのだろうか。

## 5

乱歩が「二つの部屋」「トリック」の項目で作例として挙げている作品は全部で五つある。先に挙げたロバート・ウイントンもしくはF・G・ハーストが作者だとする「二つの部屋」。デイクスの「存在しない部屋の犯罪」。クインの「神の燈火」。そして作者名が省かれており「通俗ものでは」と断って、「ファントマ物語」。そしてそれを借用し自身が昭和五年に「キング」に発表した『黄金仮面』を挙げている。デイクスはジョン・デイクスン・カー、クインは言うまでもなく、エラリー・クイーンのことである。乱歩はこの「神の燈火」をいたく気に入ったようで、戦後すぐに自身で「黒い家」として抄訳を試みている。「ファントマ物語」とあるのは、ピエール・スヴェストルとマル

セル・アランの共同執筆から成る『ファントマ』シリーズの第二作『ファントマ対ジューヴ警部』であることは、すでに平山雄一の『江戸川乱歩全集』の『黄金仮面』の「註釈」に詳しい報告がなされていた。<sup>31</sup> 一つだけそこに付け加えるならば、乱歩が『黄金仮面』の作中で要約している部分が、原作と合わない点である。これは現行入手できる唯一の翻訳であるハヤカワ文庫の『ファントマ対ジューヴ警部』の訳者佐々木善郎も、「訳者あとがき」の中で触れていて引用している箇所でもあるが、『黄金仮面』の語り手は、血まみれの女の死体が次にその部屋に入ったときに、「あとかたもなく消え去ってしまった<sup>32</sup>」としているが、『ファントマ対ジューヴ警部』では、何もなかった部屋に入ってみるとそこにさつきまでなかった死体が置かれていた<sup>33</sup>というもので、設定が真逆になっているのである。おそらくそれは乱歩の記憶違いと考えられる。

『黄金仮面』もその源流たる『ファントマ対ジューヴ警部』も、エレベーターを使った大仕掛けのトリックであり、クイーンに至っては家ごと別に用意するという体のものなので、清張の「役者絵」に一番近いのは、デイクスの「存在しない部屋の犯罪」ということになるだろう。ここでは同じフロアにあるそっくりの間取りをもつ重役の部屋を装って、招き入れたはずのアメリカ人の金持ちにウソがばれてしまい、その場で撲殺せざるを得なくなった犯人が、ルームメイトの目を欺くといった趣向がとられており、酩酊者による錯覚という意味でも、また小道具として使われる部屋の絵画においても、文五郎に騙されて酒を飲まされた宗太の設定にきわめて近い。現行では、江戸川乱歩編『世界短編傑作集5』に宇野利泰訳「見知らぬ部屋の犯罪」として読むことができる。<sup>34</sup> ただし清張と本作の接点に関しては今回未説明のまま終わった。

先の権田が指摘した「古典的な「二つの部屋」のトリックを逆用して、犯人に本音を吐かせる」とある通り、乱歩が挙げた五つの作品の中で使われた「二つの部屋」はすべて犯人側が用いたトリックであったのに対して、清張の「役

者絵」では探偵側である文五郎が用いる手段となっている。権田の「逆用」とはこのことを指している。

「役者絵」の持つ犯行と解明の図は、以前清張が「小説新潮」時代に発表した「反射」に酷似している。ともに犯行の自白を迫るものだ。「反射」では先述の通り、「ミュンスターベルク」の心理試験が用いられていた。それは言うまでもなく乱歩の出発の「心理試験」へとさかのぼるものだった。そこで、見た見ないの争点となるのが、小野小町の顔が描かれた屏風であった。「役者絵」において、簡易な部屋の模様替えとして利用された唯一の小道具が、やはり役者絵の貼られた屏風である。それは、無名の乱歩がデビューを果たした、言い換えれば日本の独自の探偵が生れ出したその瞬間にまでさかのぼることが可能な「屏風」だったと言えば、はたして言い過ぎになるだろうか。ただ、清張にとって、乱歩の初期作品のうちで、この「心理試験」のみが他の作品と一線を画するものとしてずっと認識されていた事実は、次の引用からも明らかなのである。<sup>(35)</sup>

乱歩は、恐らくこの「心理試験」に全力を傾倒したであろう。一つは、失業時代の彼が今までアルバイト的に書いていた作品を職業作家としてのものにするか、あるいは素人の余技的なものに顛落するか、その岐路に立つての試金石であった。されば、乱歩は、その頃私淑していた森下雨村や小酒井不木にその技能を問うべく、この作品に彼の全才能を投入したのである。

ここにはおそらく清張自身の体験が重ねられている。誰しも職業作家を夢見つつも、その自信と不安にさいなまれ続けながら、作品を書き進めていくしかない。少なくとも、この「解説」を書く時の清張がより身近に感じたのは、戦後の大御所としての乱歩でなく、今までの自分のキャリアにむしろ近い全力を投入する青年期の乱歩の姿であり、

そこに重ねるようにしてある自分自身ではなかったか。「小説新潮」における文壇両作家との「推理小説」での競い合いはわずか三年前の生々しい記憶のほずである。が、それからすでに十年を経過し、「役者絵」を書く清張には明らかに余裕が感じられる。それは、ごく簡単に言えば、彼が推理小説界の次の巨匠に自他とも認める存在としてなりおせたためである。「役者絵」の自白のさせ方は、かつての「反射」のそれのように偶然の反応（反射）作用によるものではなく、用意された計画から導き出されたものだった。『ファントマ』や『黄金仮面』のようにもとと荒唐無稽な大仕掛けになりがちのトリックを、江戸の長屋の四畳半のような思いもつかないところで、しかも捜査の側として応用したのは、乱歩の言うところのまさに「変化と創意」であろう。むしろ「捕物帳」という簡易な江戸の世界を背景にしてこそ生かされるのが、この「二つの部屋」のトリックだったことを逆に証明して見せたような作品とも言えるのである。

## 6

振り返ってここに取り上げた二作品の「捕物帳」を見ると、清張の独自性が薄いと考えられるかもしれない。例えばここには、確かに『無宿人別帳』で試みた、「無宿人」という江戸に彷徨していた、歴史の陰に隠れたあまたの無名的存在に対する新たな掘り起こしのようなものは見受けられない。しかし、この『無宿人別帳』の第一話の「町の島帰り」でもって、島帰りをした男の女を付け狙うような卑劣な目明しをまず創造してみせる清張にとつて、ユーロピアに近い人情話に依拠するような岡っ引の親分像を創造することはそもそも不可能だったに違いない。例えば先の『半七』の「春の雪解」にしても、殺した死体を自分の家の床下につつと埋めて置いたわけである。そこには、匂いというものが全く介在しない。そこへ通う按摩が話す気味悪さが半七に伝えられるのだが、それは怪談へと飛躍する

要素であつて、物語世界で起こつたはずの現実の犯罪や犯行はむしろ遠のいてしまう。「捕物帳」というジャンルの持つ難しさがそこにはある。というよりそれを受け継ぐ後世の作家たちが考えていかなければならない課題がそこにはあるだろう。清張は事実上最後の「捕物帳」シリーズとなつた、『紅刷り江戸噂』で何かそのことを残してはいないだろうか。

その意味を込めて注目したいのが、『紅刷り江戸噂』の最終話になつた「術」という作品である。これは大きく捉えるならば、中途半端に終わつた浪人の「女敵討ち」を、岡っ引の忠七が望見した話ということになるだろう。「女敵討ち」とは、妻を寝取られた武士が逃げていった妻とその相手を見つけ出し同時に斬るということだが、ここでの主人公である西国浪人の葉村庄兵衛は、男の方を取り逃がしている。女を殺された相手の浪人者は恐れをなして逃げ出してしまった。が、正確に言うならば、斬られた女が、庄兵衛の妻であるのかも実は判然としない。それをそう見立てる役割が、つかの間庄兵衛と関わり合いを持った岡っ引の忠七なのである。そして大道芸を生業にしていた庄兵衛もまた何も言い残さずに姿を消してしまった。

庄兵衛が忠七と関わつたのは、度重なる奇態な辻斬りの嫌疑を、居合抜きをしている庄兵衛自身に向けたためである。上野広小路の大道で自らを刀で傷つけ止血の粉薬を売つて商売としている庄兵衛は、根が善良な男で、岡っ引の忠七の抱えた謎と一緒に解いてやる。辻斬りにあつた者は一様に手を縛られたまま首を刎ねられていたが、おだやかな顔を浮かべていた。しばらくして庄兵衛は忠七の前でそれを実演して見せる。喧嘩の仲裁を装つて見物人から金を巻き上げる算段でもつて、白昼での辻斬りが繰り返されていたとした庄兵衛の「推察」はたしかに当たつていた。捕まつたのも浪人者だったが、庄兵衛が「云つた通りの方法だった」のである。ところが、男ばかりが殺された中で、唯一女の被害者があつた。西国訛りのある、やはり浪人者の妻で、二年前から本所の裏長屋に住みついてい

たが、これも首を落とされていた。その顔が恐怖でゆがんでいるのが何より他との違いだったが、女は斬られる前にひざまずいていたようだった。

ここには、連続殺人の中にまぎれた別種の殺人という趣向が明らかに読み取れる。この場合はその例外の側に、ミステリーとしての真実があることになるが、殺された女の夫婦仲は決して悪くなかったので、亭主が犯した犯行としては成り立たない。また、捕まった辻斬り犯人の浪人も貧乏暮らして妻に逃げられてはいるものの、女を斬った覚えはないと主張していた。捕まった男の動機は一種の通り魔的犯行でしかない。つまりこの女を斬ったイレギュラーな犯人が、辻斬りの謎を解いた葉村庄兵衛だったようなのだ。葉村庄兵衛の心のうちがわからないことには真相は不明だが、それが誰にも垣間見ることができないため、犯行、動機を含めた真相すべてが宙吊りにされたままで作品はおわってしまう。葉村が手を下したかどうかは、殺された女が、葉村の元の妻であることが最低条件として必要だが、岡っ引の忠七はその探査に乗り出すこともない。

事件を解決しないという意味で言えば、これは従来の「捕物帳」とは大きく異なるものだろう。が、他の『紅刷り江戸噂』の作品でも、また先行した『彩色江戸切絵図』においても、岡っ引が事件を解くことがない場合は多々あった。ただし、そこにはピカレスクな生き方をする町人の生きざまが男女ともに描かれることで、犯行や犯罪、何より人間の欲望が生々しくくずくずという清張らしい動機が常に存在していた。「術」は、犯行だけがあり、犯罪がない。それには不義者を討つという江戸時代のしきたりが働きかけていることは間違いないが、それならばなぜ彼は堂々と自分の行為を説明しないのが疑問として残るだろう。女の男は、臆病にもさっさと逃げ出してしまふような男だった。しかしそんな薄情にも見える男とでも、ささやかながらも平穏な暮らしを女は送っていた。そうした女をわざわざ探し出し、斬らなければならなかった葉村なのだが、それは、根が善良で気さくな様子の彼の印象とはおよそ異なる

る。しかも女には、斬られる際に命乞いをしていたような様子さえ見られるのである。いったい何が彼をそんなに許さなかったのだろうか。このように、葉村庄兵衛という人間の持つ不可解さだけが、不条理な謎として最後まで残されていくのである。一見すると矛盾するような物言いだだが、彼の持つ心の闇が、いわゆる従来型の犯罪者の抱く動機や行動、その心理心情といった「犯罪」に繋がるもろもろのミステリーとしての要素を、むしろことごとく断ち切るかあるいは深く覆ってしまっているような印象なのだ。

「これはわたしの推察だ。あとは親分の判断だな」と、首斬りの一件を証明して見せた葉村は語る。しかし解決された、これとは別の、女の事件への忠七の新たな「判断」「推察」のみが最後まで残されることになる。そこで確認されたのは気さくで親切な浪人葉村庄兵衛にあった「暗い影」の存在だった。しかし忠七は先のように「駆けるように」葉村を追うことはない。それは「捕物帳」にしばしば見受けられる、見逃しの構図と似てなくはないが、またどこか微妙に異なるようにも思われる。ここには、奇怪なシリアル殺人の謎がやがて別の犯行を犯すことになる人物の「推察」によって見事に解かれ、一つだけ残された謎めいた犯行を犯した人間はその動機も明らかでないまま出奔し捕まらない、そして探偵役もその容疑者らしい人物を追おうとしないというひどく奇妙で歪な形の「捕物帳」が成立してしまっている。これを一体どのように考えていけばいいのだろうか。

それに対する答えではないが、庄兵衛という人物は、「術」という自身の持つ技について独自の考えを抱いていた。大道芸をしている庄兵衛は因縁をつけてきたイカサマだけをする香具師（ヤシ）に向かって次のように自説を説いてみせる。<sup>(36)</sup>

「なるほど、おまえの云う通り、おれのこの葉は効かないかもしれぬ。だが、おれは自分の腕に傷をつけて血が止る術を知っている。葉よりも術を売っているのだ。見物衆はおれの葉がどれほど効能があるかどうかは疑って

いるが、このわが身を傷つけてまで商売をしているのに免じて買って下さるのだ。いわばわしの術を買って下さるのだ」

「術だと?」

「そうだ。これはわしだけしか出来ないと思っている。べつにカラクリも何もない。修練だ。そこへゆくとおまえのは前口上に手品を見せ、そのあとイカサマの奥義を売りつける。こりゃ術じゃない。どうせ香具師の品物だが、そのイカサマは困る」

ここで葉村庄兵衛が整然と説いて見せる「術」とは何か。同じく、どうせ香具師の品物だが、「イカサマ」は困ると言っている「イカサマ」とは何か。庄兵衛はこの術は自分だけしかできないものとも言っていた。彼の血が止まるのは、薬のせいではなく、彼が体得した術のおかげであり、見物衆は「わが身を傷つける」庄兵衛に免じて、その薬を買ってくれているのだと言う。庄兵衛の名は、あるいは「商売」に通じるのかもしれないが、彼は「術」と「イカサマ」との両義の部分を、虚実の皮膜のように使い分け生き抜くことに熟達した人物と考えられる。この血を止める「術」は、「修練」の一つであり、そこに何のカラクリもないものとされている。正直なところこれをどう取り扱うべきかわからないのだが、どこかこの庄兵衛に体现された「術」は、捕物帳の域を超え、清張が置かれていた昭和四十年代の推理小説状況に響いていく一つの警鐘のように感じられなくもない。「別冊宝石」やその発展した形である「別冊小説宝石」に限って言えば、そこでのミステリーはすでに大きく「ドキュメント推理小説特集」（昭和四十二年六月「別冊宝石」）や「産業スパイ小説特集」（昭和四十二年八月「別冊小説宝石」）のように独自の姿容を起こし分岐しつつあった。そのためミステリー自体が全体としてどこか軽量化していくような量産に入っていくのが、この第三

期の「宝石」の昭和四十年代の様子であったことは間違いない<sup>(38)</sup>。

また、この「術」とは、これまで見てきたトリックとの関係を表す比喻として読めないこともない。完全に新しいトリック自体を創出することはないが、それを使いこなす「術」だけは、身を削るような修練の果に何とか手にしている。そういった人物とは言うまでもなく清張自身にほかならないはずである。

清張をじかに知っていた人物たちはしばしばこの浪人葉村の風貌に松本清張自身を重ね合わせていた<sup>(39)</sup>。それはただの偶然かもしれないが、興味ある指摘である。清張は自分の風貌と同じような人物というものをほとんど書かなかつた作家だからだ。そして、その似た顔つきを持った人物は、忽然と岡っ引の前から姿を消した。少なくとも、鮮やかすぎる、それは退場劇ではないだろうか。

十九世紀に成り立ち確立し始めた探偵小説の流れが二十世紀に入り、日本で前近代の江戸の時代を背景とした独自のローカルなミステリーである「捕物帳」というジャンルを生み出した。その舞台には数多くの目明しや岡っ引が登場した。一方でトリックというものの残像を追う捕物帳は、江戸の風情やユートピアとしての人情の世界を垣間見せることも忘れなかった。白石潔が証言している防空壕下でも読み続けられていた捕物帳には、そうした郷愁と切り離すことのできない魅力があったはずである。それは捕物帳自体が、過去のトリックという遺産と江戸の生活という二重の郷愁を常に夢見るものとして自己を規定する働きからきているが、清張の最後に書いた捕物帳である「術」はそれに何か深い一石を投じているのではないだろうか。

(1) 山田有策「江戸の〈切絵図〉と〈噂〉——捕物帳と清張——」〔松本清張研究〕第七号 二〇〇六年三月 北九州

- (2) 吉野泰平「松本清張「穴の中の護符」と『半七捕物帳』―「擬本」という方法―」『松本清張研究』第十九号 二〇一八年三月 北九州市立松本清張記念館
- (3) 野崎六助『捕物帖の百年 歴史の光と影』(二〇一〇年七月 彩流社) 二〇四頁
- (4) 松本清張、平野謙、江戸川乱歩「座談会 推理小説と文学」(『宝石』昭和三十四年五月 宝石社) 二三〇頁
- (5) 三好行雄「解説」『突風』(一九七四年三月 中公文庫) 二六八頁
- (6) 「穴の中の護符」の引用は、昭和四十一年十二月発行の単行本『突風』(海燕社)に拠る。なおこの作品は、中公文庫では一番最後に配列されているが、上記単行本では、七作中の四番目に収められている。引用箇所の間部分で気になるのは、三番目の引用箇所の中程、「わたし」のセリフで「何の目的ですか」とあるのが、初出、初刊ともこのままだが、中公文庫版では、「何の目印ですか」に直されている点である。以下に引用する長文の本文引用箇所は順に、一五三頁、一三八頁、一五七頁である。なおルビは適宜、以下本文引用は同じくした。
- (7) 注(2) 一一一頁
- (8) 今内孜編著『半七捕物帳事典』(二〇一〇年一月 国書刊行会) 六八五頁
- (9) 松本清張「あとがき」『鬼畜 松本清張短編全集7』(一九六四年六月 光文社カッパ・ノベルズ) ただし引用は光文社文庫版 二八〇頁
- (10) 現題名は「雪の上の呼び声」『大岡昇平全集5』(一九九五年十二月 筑摩書房) 七三三頁参照
- (11) これら以外のものが乱歩関連の作を挙げれば、プロバビリテイの犯行としての「なぜ「星図」が開いていたか」(乱歩「赤い部屋」)が挙げられる。
- (12) 石田文字訳 コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』(平成二十二年二月 角川文庫) 四五三頁

- (13) 注(12) 七九頁
- (14) BANTAM CLASSIC : SIR ARTHUR CONAN DOYLE : SHERLOCK HOLMES THE COMPLETE NOVELS AND STORIES Volume I 二八五頁
- (15) 江戸川乱歩「類別トリック集成」『続・幻影城』(昭和二十九年六月 早川書房) 引用は『江戸川乱歩全集 第27巻』(二〇〇四年三月 光文社文庫) 二〇七頁。該当箇所のは初出は「寶石」(昭和二十八年十月 岩谷書店)
- (16) この「類別トリック集成」は、乱歩によれば、渡辺剣次、武田武彦、黒部龍二、中島河太郎、桂英二などの複数の協力者があったことが明かされている。
- (17) 中島河太郎編『日本推理小説辞典』(昭和六十年九月 東京堂出版) 二五六頁。『没後25年 日影丈吉と雑誌「寶石」の作家たち—日影丈吉、江戸川乱歩、横溝正史、城昌幸、山田風太郎—展』(二〇一五年十月 町田市民文学館ことばらんど) 四三頁
- (18) 『ゼロの焦点』をはじめ筑摩書房の雑誌「太陽」に載せられたが、掲載二話で雑誌が廃刊となり、乱歩の好意で「寶石」に掲載を再開した。「寶石」昭和三十三年三月号に、「R」の署名でその経緯が紹介された囲み記事がある。
- (19) 「別冊宝石」の創刊は、昭和四十一年八月一日で、「推理小説特集号」として「松本清張・責任編集」となっており、清張はここに現代小説の「雨」という短篇を寄稿している。
- (20) 郷原宏『松本清張事典 決定版』(平成十七年四月 角川学芸出版) 二一八六頁
- (21) 乱歩との世代交代は、すでにこれより以前、昭和三十八年八月の日本推理作家協会の二代目理事長を引き受けた際の清張の乱歩邸訪問によく出ている。一緒に付き添った山村正夫が病勢の悪化により衰え切った乱歩の姿

- を目の当たりした清張の様子をよく伝えている。「一匹狼の巨人」(『小説宝石』一九九二年九月 光文社) ちなみにこの「小説宝石」は、清張自身の追悼号でもある。
- (22) 昭和三十九年一月から十二月にかけて「オール讀物」に発表された六話からなる『彩色江戸切絵図』が先行する。
- (23) 「虎」は、その全体の骨格を、清張の好んだロイ・ヴィカーズの『迷宮課事件簿Ⅰ』(一九七七年五月 ハヤカワ文庫) シリーズの「ゴムのラッパ」にも負うている。
- (24) 権田萬治「人と作品 松本清張」『紅刷り江戸噂』(一九九七年八月 講談社大衆文学館文庫コレクション) 三二〇頁
- (25) 注(15) 二〇八頁
- (26) 注(15) 一八四頁
- (27) 縄田一男「解説」『大江戸歳時記 捕物帳傑作選 春の巻』(一九九〇年三月 河出文庫) 二五八頁 なお先の「花見の留守」の初出は、昭和二十八年三月「オール讀物」(文藝春秋新社) である。
- (28) 野村胡堂(談)「捕物小説について」『探偵作家クラブ会報』十九号(昭和二十三年十二月) ただし引用は『探偵作家クラブ会報』(一九九〇年六月 柏書房) 一八五頁
- (29) 白石潔『探偵小説の郷愁について』(昭和二十四年二月 不二書房) 所収
- (30) 注(15) 一六九頁
- (31) 平山雄一「註釈」『江戸川乱歩全集 第7巻 黄金仮面』(二〇〇三年九月 光文社) 六四四頁
- (32) 注(31) 二九三頁

(33) 佐々木善郎訳 P・ピエール・スーヴェスト&M・アラン『ファントマ対ジューヴ警部』（昭和五十三年四月

ハヤカワ文庫）「しかし、ジューヴと自分がわずか数分前に後にしたばかりのシャレック博士の書齋に一歩足を踏み入れたとたん、ファンドールの口から思わず叫び声もれた。／「ああ、こいつはひどい！」（四七頁）となり、二人は「むざんに碎かれ、押しつぶされた、血まみれの女のからだが目に入った」のであって、その場になかった死体に出くわしたので、あった死体が消え去ったわけではない。

(34) 江戸川乱歩編『世界短編傑作集5』（一九六一年五月 創元推理文庫）

(35) 松本清張「解説」『日本推理小説大系第2巻 江戸川乱歩集』（昭和三十五年四月 東都書房）三〇七頁

(36) 『紅刷り江戸噂』（昭和四十三年三月 講談社）二一九頁

(37) 「役者絵」が掲載された昭和四十二年一月一日発行の「別冊宝石」は、同年八月一日から「別冊小説宝石」へと雑誌名が変わり、年四回発行が六回発行へと改められた。

(38) ただし山前譲が『甦る推理雑誌9 「別冊宝石」傑作選』（二〇〇三年十一月 光文社）の中で、「五八年十二月には、「宝石」増刊の名物だった「エロティック・ミステリー」も加わっている。（略）五九年には、「世界探偵小説全集」と「エロティック・ミステリー」が交互に出されている」（七頁）と指摘している通り、もとの「宝石」や「別冊宝石」にも、読者受けをするエンターテイメント系を積極的に押し出す傾向は強く存在した。

(39) 加太こうじ「解説」『松本清張全集24巻 無宿人別帳・他』（一九七二年十月 文藝春秋社）五一九頁。 権田

萬治 注（24）三一九頁